

# 十王經思想の系流と日本の攝受

——yama rāja 思想を中心として——

岩 佐 貫 三

Rg-Veda にみえたる焰摩王・Yama-rāja は元來死者の靈魂を冥界の樂土に導いて幸福にさせるという役目をもつものであり、從て古代印度の十二天の一としての焰摩王は明朗な穩やかな性格をもつものであつたと考えられる。宋の道明和尚・被帽地藏十王・金毛獅子の一連の淨土教的故事を考へても、うかがえる興味ある事柄である。奈良西大寺、京都東寺の密教的の唐朝畫風様式の十二天畫像の焰摩像は之を證明するものと云てよい。しかるにこれが宋朝的な畫風になると俄然、暗黒面が加り、地獄の司裁官としての性格を表現するようになる。摩が魔におきかえられたのもこの邊の推移（一説には梁武帝頃ともいう）に原因するのであらうか。今日吾々の常識にある十王はともかく中國のカラーの濃更なものである。この明・暗二系の yama-rāja を考へ、更に十王經の偽

經的成立を檢討し、この中に包含された中國思想なり、中國土俗信仰とのシンクレットを考へ、又、これが日本への承傳の時機なり、その經路を考へ、降つては再び日本の宗教觀として我が中世以降の淨土思想への展開なり、地藏菩薩信仰として、明・暗・明の思想的に辿つた逆轉乃至は展開を後づけてみたい。

平安朝末期の製作と推定される日本の偽經の一つ、地藏菩薩發心因緣十王經の諸殘卷本や零本を系統的に整理する方法に依て現在日本に傳る十王經なり、その繪卷本の文獻を通して日本に於ける中國の乃至は印度的十王思想の攝受の實態の一を理解する方法が考へられる。元々十王經には周知の如く地藏經（地藏菩薩發心因緣十王經）系と豫修生七經（閻羅王授記四衆逆修生七往生淨土經）の二つがある。

東京の中村書道博物館本や長尾美術館本、或は新修大藏經

圖像部に収録されている高野山舊多聞院本は勿論のこと、海外にあつてはフランス國民圖書館の敦煌本なり、大英博物館の殘卷本等は時代的にも鎌倉期以前の資料であり、これらはずべて豫修十王生七經系統のものであり、これに對して地藏經系のものはすべてわが鎌倉期以降のものであり、ここに地藏菩薩發心因緣十王經と豫修十王生七經の二系統は截然と時代的にも、地域的にも一應は區別されておると云えよう。そして宋元の圖式に倣て鎌倉期に十王圖が作製されたと考えられることは鎌倉期に於ける禪宗の渡來と附隨して十王經が承來され、これにはかの五代、宋元の頃の中國に於ける地藏菩薩中心の十王信仰が大きく影響したることによつても考えられることなのである。我が國に承來されて後、如何なる經過をふんでこれが日本式の本地佛の配列に迄變化したのであらうか。ここに日本的十王思想の攝受方法なり、その特殊な習合化ということが考えられるのである。從て今、中國に於いて預修十王生七經の逆修思想が中國的倫理思想の下に追薦（追善）思想に迄、變化した經緯及び我國に十王信仰の承來時、如何なる形態によつて之を受容し變成せしめたか、これに伴う十王經二系の承傳は如何に行はれたか等を併せ考えねばなるまい。また當然と上げられねばならない問題の一に中國佛教に於ける孝道という問題がある。かの父母恩重經なり、この十王生七經が唐代に現れたということは地藏菩薩信仰を

背景とした豫修生七齋なり、逆修生七齋行事が唐末の頃から自己への豫修齋、逆修齋から亡き父母への孝養たる祭祀・追善齋へと變轉して行つたからである。儒教倫理に説かれる死後の孝養、葬祭の行事と佛教的に止揚されて亡人齋の作法に迄變轉したものが遠く朝鮮・日本に迄影響して死者に對する遺族の當然なすべき行爲として家族制度内に於ける佛教の實踐倫理となり、日常の習俗として廣く普及して近世佛教の基盤となつたのである。わが國における平安末から鎌倉期の初めにかけて新しく禪僧によつて承來した豫修十王生七經が地藏菩薩發心因緣十王經一卷と改訂されて世間に流布し、これに伴うて地藏十王圖やその彫刻が盛に製作され、又、地藏中心のものから本地佛并信のものへと移行して行つたが、地藏十王經が葬送後の中陰年忌の佛忌の典故となつてゐるのに對し、之に伴うて更に室町期の十三佛信仰となり、更には中陰七七日・百日・一年・三年のほか七年・十三年・三十三年を加えて十七年二十五年を更に加え、年忌佛は益々その數をましてゆくのである。けだし佛教の香火的性格なり、追善佛教の大衆化は近世佛教の一大特色であるが、その影には唐代から以降の十王經信仰の變轉に伴うところの東洋思想上の宿命的底流が存する。豫修・逆修齋とは生前に功德修善之功により死後の責苦を免れむという意味であつたらしい。そしていつのまにか、これに中國的儒教の孝道觀なり、道教的思考

が混入し、追薦の義と變り、少くとも唐末の頃迄に追福、追善の修齋行事として轉移して行つたのである。

更に考えるべき問題の二に閻羅王と泰山府君王の關連がある。この二者は一連の東洋思想としてその司命思想に於ては共通するが元來別個の地域と民族の間に發達した二系統の冥府の地祇である。波斯古代の Zoroaster 系の摩尼教の十界冥王思想との關連も考えねばならない。(松本榮一博士所說參照) 更には古代印度の新波羅門教の教典・プラーマナ *Prāmaṇanda*・プラーナ *purāna* に於ける司命官・*citrāgupta* と周禮・太宗伯の司命官の系統について考える必要があらう。外來の佛教が中國に傳導を始めた時、それが社會に浸透するにつれて、二者が相互によく影響を與へ乍ら、時にはシンクレットして根強い通俗信仰としてのタイプに轉移して行つたことは考えられる。この間の事情は唐の唐臨の冥報記、第八話に詳細に誌されておる。この三國思想の關連を考える時、十王思想の陰陽道への介入・司命祭祓と中國佛教の豫修法齋・追薦法齋との分歧、更にはわが國にあつては中國式香華佛教の日本神道への投影等いくつかの問題が次々と派生して來るであらう。このようにして宋元の頃から中國における豫修十王生七經思想なり、逆修生七齋思想が中國固有の孝道倫理觀の影響をうけて追薦思想に迄、變展しこの思想が鎌倉期に禪の渡來の頃既に流傳し、末法思想の中に融け込んで南北朝か

十王經思想の系流と日本の攝受(岩佐)

ら室町期にかけて國民思想に融合したものであらうが、中國十王思想の日本的攝受の形態には次のような時機と流れをよみとる事ができよう。即ちこの頃、地獄草紙式の繪卷十王經が諸寺院に奉獻され偶々これが觀音信仰なり、淨土信仰と習合してこの國に於ける中陰供養思想なり、信仰の發生を促したのである。降て足利期の存覺の淨土見聞集なり、鎌倉期の日蓮聖人の十王讚歎鈔等があらわれたが、これらの眞偽問題は別として日本人のもつ中世的思考の所産として一の資料を形成してくれたものといつてよいであらう。か様にして十王圖の製作は唐末の十王經の出現に始り、經卷挿繪的なものから次第に發展して遂に亡人裁斷の十王圖を夫々一幀に仕立て、十幀を以て一組となすものが作り出されたのである。この問題は十王經繪卷の上から重視する必要がある。我國にも宋元時代になつたその種の圖本に倣て十王圖の作製がおこり、殊に鎌倉期にはその全盛期に達した觀があるが、ここに問題となるのは密教畫の焰摩天像と顯教的な畫像の明暗に互る著しいちがいがいということである。この事から更には閻魔王の一佛二體の義を考えなければなるまい。いくつかの美術的考證がこれについてはできようが今一の例を考えると建長三年の佛師幸有の作と伝えられる鎌倉、圓應寺藏の閻魔王像の脇侍の初江王像の人頭杖の如く誠に特異な性格の一致を巧に表現して居るものと云てよい。この人頭杖(檀掣杖)の形情は密

教思想から淨土信仰への變轉を誠に珍しい形式で表現しておると思う。十王經繪卷から圖幅へと移行する過渡期にみられる珍しい形式のものと思はれるし、この邊に密教信仰の性格をすて、淨土信仰と習合し、大衆化する時代的の要求の姿がみられるのではなからうか。更にわが國の鎌倉時代の繪卷本、十王經の發生について一べつしてみよう。わが國の地藏十王經については地藏十王經を圖卷として繪卷物の體裁をととのへたのは恐らく鎌倉時代に遡るであらうし、このことは又禮拜像の十王圖や十王像の彫刻が鎌倉時代に流行しておるところからも考えられるし、又、地獄繪卷・六道圖・餓鬼草紙などの如き繪卷物との關連からも想像できる。けだし晩唐五代の時代精神と類似したものがわが鎌倉期にもあつたであらうし、降て桃山時代には圖繪をもつた冊子本の流布が現存のものより判斷してある程度は判るが、江戸時代には更に多くの刊本にみられるものは十王經文に挿畫の添えられておるものがある。京都大徳寺所藏（3）にかかる陸信忠筆の圖式なり、法苑珠林卷二十六に所載されている十王圖の筆者・陸仲淵の人物想定からも直輸入の十王圖の型式のリアルなものと釋尊像を地藏圖におきかえた新謂「被帽地藏十王」・「金毛獅子」・「道明和尚」のシステムによる冥府圖とその背景にある阿彌陀像にも注意されるし、圓應寺（5）藏の初江王像の胎内背面に墨書された「なむあみだ佛」・「なむあみだ如來」等の字

句から考えられる淨土信仰への十王思想の抱着は更に地藏本佛を主とした閻魔信仰に變形しつつ、かつての藤原期に由來するところの六道圖の日本化したものを更にその基底において誠に見事に勸善懲惡的な中國十王思想の一變形を内包しつつ發展したのである。更にこのことは人間の罪惡觀を悟らして佛道に歸依させるといふ方法として死後に罪人の落ちてゆく世界の十王という司命裁定官とこれがためにこそ反て六道の苦惱からいつさいの衆生を救濟するという地藏菩薩の信仰はわが國の固來の民俗信仰（恐山思想なり、賽河原思想なり等）とも關連しつつ、通俗的にはかの地藏靈驗地なり、地藏繪卷の出現ともなつて更には十王經繪卷本來の性格から、かなり逸脱して變形され後世に迄、流布されるに至つたのではなからうか。

- 1 松本榮一博士・燉煌畫の研究（圖像篇）第七節東方文化學院東京研究所刊（三七五頁）
- 2 大正藏・第五十四卷（一一八二頁）  
波斯教殘經曰、誠信以像十天大王、具足以像降魔勝使、忍辱以像地藏明使云々
- 3 國華第三十四編第一冊第三百九十八號（大正十二・七）  
「鎌倉古寺の什寶」參照。鎌倉國寶館藏
- 4 國華第百七十五號十五圖參照。京都大徳寺藏
- 5 前記(3)國華參照